280s陳寿（233-297）／三国志　　西晋265-316　　チン・ジュ

・王沈（？-266）／魏書　　オウ・シン
・魚豢（190s-270s）／魏略　　キョ・カン　　「キョ」の読み
・韋昭（？―273）／呉書　　イ・ショウ
・429裴松之（372-451）／注　　南宋420-579　　ハイ・ショウシ
（雁註）陳寿没後、130年ほど経て注が完成
・1957盧弼（1876-1967）／三國志集解　　中華民国　ロ・ヒツ　　藝文印書館（台湾）
・1987.1996今鷹真・井波律子・小南一郎／正史　三国志　全８冊、筑摩学芸文庫
・1993今鷹真ほか訳／三国志　全3／世界古典文学全集、筑摩書房

1989今鷹 真／三国志／解説／世界古典文学全集24c
〇三国志の背景
三国鼎立の状況が収束し、西晋による統一がなされて間もなくの時期に書かれた。
蜀の滅亡は263、魏の禅譲は265、呉の滅亡は280である。
作者・陳寿の仕えていた蜀、その蜀と常に敵対しつづけた魏が滅んだのは、陳寿が30歳を過ぎた時であった。それから統一まで20年近くを経過した。三国時代の生々しい記憶が残っていた。敵国魏の後を受けて成立した西晋王朝のもとで、歴史を書くので、細心の注意が必要であった。
前漢の司馬遷（BC145-BC87?）、後漢の班固（32-92）、ともに不幸な運命に遭遇した。
春秋は孔子が魯の年代記を基に、自己の思想を伝えた。近い時代を扱うことは、歴史家につきまとう困難さを持つ。

〇陳寿の記述、背景
蜀の国で、譙周（しょうしゅう）に師事し、春秋の三伝（左氏伝、公羊伝、穀梁伝）を学び、史記、漢書を熱心に勉強した。司馬遷は紀伝体の史書の体裁で、五つの区分を考え出した
1　本紀：支配者、支配王朝を年代的に描く
2　表：時間の経過をグラフ（表）で示す
3　書：礼楽、祭祀、経済など個別の問題
4　世家：春秋、戦国などの時代の地方諸侯王の動きと漢代の諸侯王について
5　列伝：各時代に活躍した個人の伝記と周辺民族について
歴史を総合的、発展的に捉えた。

〇魏、蜀、呉（三國並立）
三国の君主が皇帝と称して、天子として相争った。魏は後漢の禅譲を受けた正当な天子であった。
天子（皇帝）は、ただ一人であるはずなのに、三人も現れた。
一国（魏）の正統性と三国鼎立の事実を同時に描くことが必要となった。
魏の皇帝のみ「紀」、蜀・呉の君主は「伝」（列伝）
魏、皇帝の死：王、〇〇殿に「崩」ず
蜀、先主：〇「殂」（そ）す。〇「卒」（しゅっ）す　*名を言わない　*史官が設置されず、史料なし
呉、公、先主：〇□　　□=コウず　諱（いみな、本名）を記し、死去の場所を書かない

〇陳寿の記述態度
事実の確実さを求めて慎重であった。事実の枠を踏み出すことはしない。
三国志に対する批判
1　諸葛亮の記事（今鷹）諸葛亮親子への非難的記事は歴史家として公正な立場から書かれている
2　伝の人物の妥当性（今鷹）晋書は俗説を乗せて、根のないいいがかりである
3　魏を正統とする（今鷹）漢の血統を引く蜀を正統とする必要性の時代もあった
・歴史の現実を描くのが史書の役割とすると、黄河沿岸の最も広大な地域を領有し、主導権を持っていた魏を正統とするのは正しい

〇裴松之とその注
429裴松之（372-451）／注　南朝・劉宋（太祖・劉裕、りゅうゆう）の文帝の命　異聞，異説の史料

批判も行っている。　息子・裴駰は史記集解。現存最古の注釈書

（小南一郎）年表　155-283